

円仁（えんにん 794-864）は 15 歳の時に最澄の弟子になり、20 年あまり比叡山に籠り、その後関東を巡って再び比叡山に戻ってきた。40 歳の時、身体が弱り目も見えなくなってきたため死を覚悟した円仁は、この横川に草庵をむすび、ここで三年間、法華懺法と四種三昧を行った。やがて病が癒え視力も戻り、そこで、千年使っても擦り減らないという硬い石墨で擦った墨と、草で作った筆を使い、法華経八巻を書写し、書写した御経を安置する小塔を建てた。それがこの根本如法塔のはじまりである。

御経、特に法華経を書写し埋納する如法経（にょほうきょう）は、日本で円仁が始めたのが元祖とされる。写経にあたっては身を清め、特別な水と石墨の硯を用い、動物の毛を使った筆は使用しない、などの規則が定められている。根本如法塔と横川中堂のあいだには、御経を書写するときに用いる如法水を汲んだ閼伽井堂がある。その後、円仁は 45 歳で唐に渡る。根本如法塔と横川中堂のあいだには、御経を書写するときに用いる如法水を汲み出すための閼伽井堂がある。

円仁が草庵をむすび、小塔を建てた場所は根本杉洞（こんぽんすぎのほら）といい、根本杉と呼ばれる大杉があった。小塔の中には法華経の写経が納められ、法華経が重要な仏として位置付けている釈迦如来と多宝仏が本尊として祀られている。